



〈研究〉獨逸ノ産業革命及ビソノ發達ニツキテ(2)

石澤, 久五郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 21(3):661-676

(Issue Date)

1916-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00052587>



獨逸ノ産業革命及ビソノ發達ニツキテ (其二)

ドクトル・オグ
フィロソフイー

石澤久五郎

六

獨逸ハ帝國統一ノ大業ヲ成就シタト同時ニ戰勝ノ結果、アルサス、ローレンス兩州ヲ割讓セシメ、五十億法ノ償金ヲ收受シタ。コノ二州ハ産業ノ發達シタ地方デアツタノデ、國內ニ於ケル從來ノ製造業ニ對シ優勝ナ競爭者ヲ持ツコトニナツテ、獨逸産業ノ發達ヲ刺激シタ。又巨額ノ償金ハ直接間接ニ金融市場ニ流出シテ資本ノ増加トナリ、新産業組織ノ成立ニ多大ノ便宜ヲ與ヘタ。サテカウシタ經濟事情ノ下ニ工場制工業時代ニ推移シタモノデ、コノ經濟的推移ガ産業革命ト稱スベキモノデアツタ。嚴密ニイハ、産業革新デアラウ。從ツテ領土ノ獲得ト償金ノ收受トハ獨逸産業ノ發達ヲ促進シタトコロノ有力ナ原因デアツタ。シカシナガラコレハ根本的ノ原因デハナカツタ。サラバコノ根本的原因ハ何ンデアルカトイフニ獨逸人ノ産業國民トシテノ國民性、科學的研究ヲ重ズルノ態度及ビ教育ノ普及シテ居ルコトノ三ツデアル。(一)獨逸人ハ自國ノ歷史的訓練ノ結果トシテ英米人ノヤウニ獨立

自主ノ精神ニ於テハ及バヌガ、從順デ自分ノ天分ニ満足スルノ氣質ヲ持ツテ居ル永ク不毛ノ土地ニ定住シテ不自由ナ經濟生活ヲ持續シタ、メニ、外國ニ適應スルヤウニ耐苦持久ノ性ヲ養ツテ、自然ト勤勉力行ノ民トナツタ、同時ニ思想ノ堅實ナ緻密ナ、國民トナツタ、此等ノ特性ガ互ニ結び付イテ計畫的ナ企業家ヲ造リ、順良ナ勞働者ヲ造ツタ。而シテ獨逸産業ノ發達ハマヅ第一ニ彼等ノ經濟的活動ニ負フモノデアアル(二)已ニ説イタヤウニ獨逸人ノ思想ハ周到緻密デアアル、從ツテ科學的研究ノ盛ンデアアルノハ必然ノ結果デアラネバナラス、コノ科學的研究ノ結果ハ應用電氣學ノ發達トナツテ、電氣力ノ應用ガ種々ノ方面ニ擴ゲラレタ。又化學ノ進歩トナツタ、種々ノ工夫ヤ發明トナツタ、ソノ結果ハ化學工業ノ發達デアッタ。思フニ現代産業ノ發達ハ電氣工業及ビ化學工業ニ負フトコロ甚ダ大ナルモノガアル、故ニ科學的研究ノ盛ンデアアルコトハ獨逸ノ産業發達ノ根本原因デアラネバナラス。

(三)第三ノ原因トシテ教育ノ普及ヲ舉ゲネバナラス、而シテコレハ科學的研究ト相俟ツテ獨逸ノ産業ヲ根本的ニ發達セシメタ、何ントナレバ獨逸人ノ産業國民トシテノ必要ナ訓練ハ教育ニヨツテ與ヘラル、カラデアアル。サレバコノ見地カラ帝國統一ノ翌年(一八七二年)ニ新教育令ヲ發布シテ國民教育ノ統一ヲ計ツタガ、戰後

ノ經營ニ忙殺セラレテ、充分ノ力ヲ新教育ニ盡クスコトガ出來ナカツタ。一八八八年現皇帝ウキルヘルム二世ガ即位スルヤ、ソノ翌年ニ教育革新ニ關スル勅諭三綱ヲ發布シタ、ソノ第二綱ニ於テ「本邦歴史殊ニ本邦ノ社會的經濟發達ニ關シテハ今世紀ノ初葉ヨリ現今ニ至ルマデノ狀態ヲ充分ニ教授スベシ」ト宣言シテ居ル。於是國民教育ニ於テモ、高等教育ニ於テモ國民經濟ノ大要ヲ教ヘルコトガ教育ノ主要眼目トナツタ。カクシテ獨逸ノ教育ハ獨逸思想ヲ涵養スルト同時に、青年ノ經濟的實力ヲ養成スルノヲ目的トシテ、古典的尙ホ古的教育ヲ抑ヘテ、實科學校ノ數ヲ増加シタ、而シテコノ實際的新教育ハ中等教育ニモ編制セラレタ、即チ高等實科學校ノ新設ガ之デアル。高等工業學校ハ早ク千八百十六年頃ニ創設セラレタガ、久シク發展ノ氣運ニ向ハズニ不振ノ狀態ニナツタガ、一度高等工業學校ノ必要ガ感ゼラル、ヤウニナツテカラノ發達、即チコノ二三十年間ニ長足ノ發達ヲ遂ゲテ工科大學ト相競フヤウニナツタ。次イデ高等商業學校モコレト雁行シテ發達スルコト、ナツタ。又實業教育ト國民教育ヲ聯絡スルモノニ實業補習教育ガアツテ各聯邦ハ競フテ補習教育ノ發達ニ力ヲ盡シテ居ル。カヤウニシテ獨逸青年ハ極メテ嚴格ナ權威ノ下ニ築カレタトコロノ強制的教育ニヨリ訓練セラレテ、産業的能力ヲ造ル

コト、ナツタ。從ツテ獨逸産業ノ發達ハ決シテ偶然ニ起ツタモノデナク、ソノ根蒂ガ極メテ深イモノトイハネバナラス。

サテ以上舉ゲタ三ツノ原因ヲトツテ、コレヲ日本ノ産業發達ニアテハメテ少シク論ジテ見タイト思フ。サテ産業ノ尺度トモイフベキ輸出貿易ニヨツテ日本産業ノ發達ヲミルニ、過去四十五年間ニ三十四倍ノ増加ヲ示シテ、明治元年ニ千五百五拾五萬圓デアツタノガ、四十五年ニ五億貳千六百九拾八萬圓ニ達シテ居ル、カラ實ニ著シイ發達デアル。併シナガラ、コノ五億貳參千萬圓トイフ輸出額ヲ獨逸ノ千九百十年ノ輸出額七拾四億七千五百萬麻克即チ參拾七億三千七百五拾萬圓ニ比較スルト七分ノ一ニ過ギヌ、即チ總輸出額ノ比較ニ於テ日本ハ遙ニ獨逸ニ及バヌ、從ツテ日本ハ産業發達ノ程度ニ於テ獨逸ノヨリモ甚ダ低クアル、(コノ兩國ノ人口ハ殆ンド同數デアリナガラ——獨逸ハ六千五百萬人、日本ハ六千二百萬人——)獨逸ガ服從的ノ國民デアル如ク日本人モ亦服從的ノ國民デアルニ於テ一樣デアル。獨逸人ハ勤勉力行ノ國民デアル。日本人モ大體ニ於テ勤勉力行ノ國民デアル。シカシナガラ獨逸ガ思想ニ於テ堅實デアリ緻密デアル如ク、日本人モ思想ニ於テ堅實デアリ緻密デアラルカ。此ノ點ニ於テ日本ハ堅實デアルヨリモ寧ロアキラメガヨ

イ方デアル、緻密デアルヨリモ寧ろ氣輕デ淡白ノ方デアル。コノ相違ノアルタメニ同ジク服從的國民デアリナガラ、ソノ勤勉力行ノ行爲ヲ持續スルニ於テ獨逸人ハ日本人ヨリモ根強イカヲ持ツテ居ル。コレガ日獨産業ノ發達ニ相違ノ起ツタ原因デアルマイカ。又獨逸人ハ思想ノ緻密デアルコトノ科學的研究ニ適スル性質ヲ養成シタ、而シテコノ科學的研究ニヨツテ獨逸ノ産業ハ發達シタ。サテコレヲ日本人ノ場合ニミルト相應ニ科學的研究ガ行ハレテ居ル、シカシ獨逸ニ於ケル學術上ノ研究ニ比較スルト極メテ不振デアル、從ツテ科學ノ應用ガ獨逸ノヤウニ盛ンデアラヌ、國家モ國民モ甚ダ冷淡デアル、甚ダ無頓着デアル、而シテソレダケ日本ノ産業ハ獨逸ノ産業ノヤウニ發達シ得ヌコト、ナツタ。コレヲ平タクイヘバ日本ニ於ケル科學的研究ガ充分ニ普及シ發達セス故ニ、日本産業ノ發達モ亦獨逸産業ノ發達ノヤウニ充分ニ實現セラレヌ、而シテコレハ又日獨産業ノ發達ニ相違ノ起ツタ原因デハアルマイカ。第三トシテ教育ノ普及ハ獨逸ノ産業發達ノ原因トナツテ居ル而シテソレダケ國民教育殊ニ補習教育モ實業教育モ盛ンデアル。日本モ教育ノ普及ニツキテハ可ナリニ實効ヲ舉ゲテ居ル、日清戰爭ニ又日露戰爭ニモ戰勝ヲ得タノハミナ國民教育普及ノ結果デアルトマデニ言ハレテ居ル。シカシナガラ我國ノ

國民教育殊ニ補習教育及ビ實業教育ハ獨逸ニ於ケル夫等ト同様ナ程度ニ於テ進
ンデ居ルデアラウカ、コレニツイテハ然リト答ヘ得ヌヤウデアル。即チ我ガ國民教
育ノ程度ハ獨逸ノヨリモ低イ、而シテ其ノ上、實業教育ガ獨逸ノ如ク有効ニ實施サ
レテ居ラヌヤウデアル。獨逸ノ補習教育ハ甚ダ有効ニ國民教育ヲ補ツテ居ルガ、日
本ノ補習教育ハ左様ニ進ンデ居ラヌ、コノコトガヤガテ、日獨兩國國民ノ間ニ産業國
民トシテノ修養ニ差違ヲ生ゼシムルコト、ナツタ、言イ換フレバ、産業國民トシテ
獨逸人ハ日本人ヨリモ適シテ居ルコト、ナツタ、從ツテ日本人ハ産業國民トシテ
今日ノ場合、獨逸人ノヤウニ進ンデ居ラヌ、タゞ進ミ得ル餘地ヲ持ツテ居ルトイフ
ニ過ギヌ。サレバコノ教育程度ノ相違ガ日本産業ノ發達ガ獨逸ニ及バヌ原因トナ
ツテハ居ルマイカ。コノ故ニ我々日本人ハ此等ノ短所ニ心ヲ注イデ自ラ産業的國
民トシテ優勝ナルモノニナラネバナラスト自覺スルコトガ必要デアル。而シテカ
ヤウニ國民性ヲ陶冶スルコトハ産業國トシテ立ツベキ我々日本人ニトツテ極メ
テ必要ナコトデアル。

七

(四)以上ハ獨逸人ノ産業國民トシテノ氣質及ビ能力ニ關スニモノデコレヲ獨逸

産業發達ノ基礎的原因トスル。尙此等ノ三原因ニ加ヘテ他ニ重要ナル自然的原因ガアル。由來、獨逸ハ農業國トシテ豐饒ナ國デハナカツタ、シカシナガラ現代産業ノ發達ニ必要ナ礦物——英國ノヤウニ早クカラ利用サレナカツタガ——ニ富ンデ居ル即チ石炭ト鐵トガ極メテ豐富デアル。石炭ハライン河ノ下流、ウエストフアリヤノ炭野及ビ上部シレジャ及ザール地方ヲ產出地トシテ居ル、而シテソノ產出額モ年增加シテ居ル。即チ

年	產出高	國內一人宛消費量
一八八五年	二、三四六 千噸	一・〇九 噸
一九〇〇年	一〇九、二九〇	一・七七
一九一〇年	一五二、八二八	二・〇〇
一九一一年	一六〇、七四八	二・二〇

如此デ、千九百十一年ノ產出額ハ一億六千萬噸デ一人ノ消費量ガ二噸以上ニ上ツテ居ル。而シテ此内ノ過半ガ工業用ニ使用サレ一六、バアーセント「ハ運輸交通業ニ使用サレ、一三、バアーセント「ハ家庭用ニ、一〇、バアーセント「ハ「コークス」煉炭製造ニ、五、バアーセント「ハ燈火瓦斯ヲ發生セシムルタメニ使用サレテ居ル。日本モ亦日本相當ニ石炭ヲ產出シテ居ル、併シナガラ獨逸ノ產出高ニ比較スルトソレハ甚ダ少量デアル、即チ四十五年ニハ千九百六十四萬噸ヲ產出セルニ過ギナカツタ、コレ

ヲ獨逸ノ產出高ニ比較スルト當サニソノ八分ノ一又ハ九分ノ一ニ過ギヌ。カクシテ、石炭ノ產出少キタメニ産業ノ發達ガ獨逸ノヤウデアラスカ。又ハ産業ノ發達盛ンナラザルタメニ石炭ノ產出高ガ獨逸ニ及バスノデアラウカ、又ハ獨逸ノヤウニ石炭ノ天然貯藏ガ豊富ナラヌタメカ、ソノ何レニモセヨ、相即不離ノ關係ガアルヤウニ思ハレル。又此外ニ獨逸ハ褐炭ノ多量ヲ產出シテ居ル、產地ハ中部北獨逸及ビライン河下流デ、千九百十年ノ產出額ハ七千萬噸デアツタ。カクシテ獨逸ハ世界ノ石炭產出國トシテ第三位ヲ占メテ居ル。

英 吉 利

(一九一一年)

二七六、二五五千噸

獨 逸

(一九一〇年)

二二二、三七五千噸

北米合衆國

(一九一一年)

四五〇、一六五

同

(一九一一年)

一九八、五二一

同

(一九一二年)

二五五、八一六

斯様ニ獨逸ハ英國ヲ凌ガントシテ居ル、而シテコレカラミテモ、獨逸産業ノ發達セラル狀勢ガ想像セラル、又石炭及褐炭ノ總產出高カラミルト日本ノ石炭產出高ハ十三分ノ一乃至十五分ノ一ニ過ギヌ。

次ニ鐵ノ產出高ノ多量デアルコトガ又獨逸産業ノ發達ヲ非常ニ助ケテ居ル。

一八八〇年

銑鐵產出高

二、七二九千噸

國內一人消費量

三九・三キログラム

一八九〇年

同

四、六五八

同

八一・七

一九〇〇年	同	八、五二二	同	一三一・七
一九一〇年	同	一四、七九三	同	一三五・四
一九一一年	同	一五、六五五	同	一三六・九

鐵產出高ノ増加ハ以上ノ通りデアル、而シテコノ產出高ノ増加ト共ニ獨逸ノ產業ハ發達シタ。而シテコノ銑鐵ノ五分ノ一ハ鐵道用ニ、五分ノ四ハ鋼鐵ノ精製ニ用キラルモノデアル。ソコデ日本ノ鐵產出高如何ト顧ルニ、日本ハ鐵ノ產出ニ極メテ乏シイ、コレガ日本產業發達上ニ於テ最モ不利益ナル點デアル、即チ日本ノ鐵產出高ハ四十四年ニ於テ千七百萬貫(即チ二百四十一貫ヲ一噸トミテ七萬五百三十四噸ニ過ギヌ)デアルカラ、獨逸ノ鐵產出高千五百萬噸内外ナルニ對シテ比較ノシヤウモナイ。斯様ニシテ、日本ノ產業發達ハ甚ダ不利益ナ狀態ノ下ニ抑制セラレテ居ル。更ニ獨逸ガ世界ノ鐵產出國トシテノ地位ハ次ノ通りデアル。

英吉利	(一九一一年)	銑鐵	九、八七四 ^{千噸}	鋼鐵	六、五六五 ^{千噸}
北米合衆國	(同)	同	二四、〇二七	同	二四、〇五四
獨逸	(同)	同	一五、二八〇	同	一五、〇一九

カクシテ獨逸ハ鐵產出國トシテ英吉利ヲ凌イデ第二位ニ進ンデ居ル、佛國ノ如キハ銑鐵四百四十一萬噸、鋼鐵三百六十六萬噸ヲ產出スルニ過ギヌカラ獨逸ノ三分ノ一ニモ及バヌ。獨逸ガ世界ノ產業國トシテ急速ノ進歩ヲ呈シタノモ、コノ鐵ノ

產出ニ負フトコロ大ナリトイハネバナラス。又獨逸ハ石炭及鐵ノ外ニ殆ンド獨占的天惠トシテ加里鹽ヲ產出シテ居ル、而シテソノ產出ガ一九〇一年ニハ三百五十萬噸許ニ過ギナカツタガ、千九百十一年ニハ千萬噸許ニ増加シテ、ソノ價格ハ一億七千萬麻克デ世界ノ市場ヲ獨占シテ居ル、而シテコレガ肥料トシテ獨逸ノ農業ヲ助ケテ居ルコトハ非常デアル。

(五)次ニ産業ノ發達ニ必要ナルハ交通機關ノ完備セルコトデアル。此ノ點ニ於テ獨逸ノ交通機關ハ陸運ニ於テ、水運ニ於テ高度ニ發達シテ居ル、即チ千八百七十年帝國統一以前ノ鐵道哩數ハ英國ノニ及バナカツタガ、ナホ發達ノ趨勢ニアツテ、ソノ哩數ハ已ニ一萬一千七百三十哩ニ達シテ居ツタ。

英	利	一八四〇年	一八五〇年	一八六〇年	一八七〇年
獨	逸	八三八	六、六二〇	一〇、四三〇	一五、五四〇
		三四一	三、六四〇	六、九八〇	一一、七三〇

カク發達ノ步調ガ英國ニ於ケルヨリモ速カデアツタ。而シテ千八百七十年後ニ於テハ遂ニ英國ノ延長哩數ヲ超エテ千九百十年ニハ五萬八千哩餘ニ達シタ。

英	吉	利	一八八七年	一九〇三年	一九〇七年	一九一〇年
獨	逸	利	一九、八一〇	二二、一五二	二二、〇八六	二二、〇八六
			二四、二七〇	三二、四七七	三六、二〇〇	五八、一五二

コノ全線路哩數ノ九二・三六「バアセント」ハ國有線トシテ運營セラレテ居ル。而シテコノ鐵道線路ノ延長ハヤガテ産業ノ發達ニヨリテ伴ハレテ居ル。更ニコレヲ我日本ノ場合ニ比較シタラドウデアラウ、日本ノ鐵道全線路哩數ハ單ニ獨逸ノ十分ノ一ニモ及バズシテ、四十四年ニハ五千六百六哩ニ過ギヌノデアアル。日本産業ノ尙幼稚ノ程度ニアルノモ、コノ事實カラ推測スルコトガ出來ル。獨逸ハコノ陸路交通ノ外水路ニヨルノ交通ガアツテソレハ非常ニ發達シテ居ル、運河ガソレデアアル、カクシテ千九百十一年ニ航行シ得ベキ運河ノ總延長ハ八千六百二十哩、其中運河及ビ運河化セル河流ノ延長約二千二百哩、又水深ニツキテ最低時六呎以上ノモノ三千五百哩、九呎四分ノ三以上ノモノ千三百八十哩、十三呎以上ノモノ八百八十哩デアアル。コノ點ニ於テ日本ハ島國デアアルカラ獨逸ト事情ガ違ツテ居ル、而シテ沿岸航行ハ獨逸ノ運河航通ニ相當シテ居ル。シカシ地勢ガ英國ノ如ク平坦デナク山岳ガ脊梁トナツテ居ルノデ内地ノ交通ハ未ダ充分デナイ、而シテコノ地勢ガ鐵道線路ノ延長ヲ妨ゲテ居ル、同様ニ鐵道線路延長ノ遅々タルコトガ又産業ノ發達ヲ遲緩ナラシメテ居ル(獨逸ノ産業發達ニ比較シテ)即チ獨逸ハ産業革命以前ニ已ニ一萬千七百三十哩ノ鐵道ヲ持ツテ居ツタ、シカシ日本ハ産業革新後五十年ニシテ僅

ニ五六千哩ニ過ギヌノデアル、コレニヨツテミルモ、日獨兩國ニ於ケル産業發達ノ遲速ノ差ヲ知ルコトガ出來ル。

八

以上ノ五原因ハ實ニ獨逸ノ産業ヲ今日ノ如クニ發達セシメタモノデアル、シカシコノ外ニモ一二、重要ナ原因ガアル、コレハ獨逸政府ノ執リ來ツタトコロノ保護政策ガソレデアル。シカシ常習トシテ持續セラル、保護政策ガ如何ナル程度ニ於テ産業ノ發達ヲ助ケタカヲ推定スルコトハ興味アル問題タルト共ニ甚ダ困難ナル問題デアル、而シテコノ保護政策ハ善良ナル結果許デナク、惡イ影響ヲモ産業社會ニ與フルモノデアルカラ、コレヲトリイデ、産業發達ノ原因トシテ取扱フトキニモ多大ノ注意ヲ拂ハネバナラス、ソレ故ニコ、ニハ保護政策ガ獨逸ノ産業發達ヲ急速ナラシメタトコロノ一原因トシテアグルニ止メテ、詳シイコトハ特別ノ研究ニユヅルコト、スル。

又人口ノ増加ガ獨逸ノ産業發達ノ一原因トシテ數ヘラレテ居ル。ソレハ現代ノ産業ハ勞力ノ豊富ナル供給ニ俟ツアルト共ニ——勞力ノ節約ハ勉メラル、カ——人口ノ増加ハ國內ニアツテハ需用ノ増加トナツテ工業ヲ刺激スルモノデアル、即チ

コノ増加シタ人口ニ向ツテ單ニ衣食ヲ得セシムル許リデナク、同時ニ其ノ生活狀態ヲ改善シ、彼等ノ幸福ヲ進ムルタメニ産業ノ發達ヲ圖ルノ必要ガアル。從ツテコノ理由カラ人口ノ増加ハ産業發達ノ原因トナルモノデアル。トコロデ人口ノ増加ノ獨逸ノ産業發達ノ上ニドウ働イタカトイフニ、コレモナカ／＼ニ研究ヲ要スル問題デアル。ソコデ獨逸ハコノ人口ノ急激ナ増加ニヨツテ半世紀ノ間願ハシキ刺激以上ニ苦痛ヲ感ジタヤウニ思ハル、即チ獨逸ハ産業革新ノ未ダ起ラヌ數十年前カラ人口増加ニ苦シム、而シテコノ方面ノ壓迫ガ甚シカツタノデ、獨逸ハ千八百四十年頃カラ多數ノ移民ヲ海外ニ送ラネバナラヌコトニナツタ。又コノ必要カラ海外ニ殖民地ヲ求ムルコト、ナツタ、而シテソレハ千八百八十三年以後ノコトデアツタ、シカシコノ殖民地ノ獲得モ人口増加問題ヲ解決スルニ充分有効ナモノデナカツタ。獨逸ノ殖民地經營ノ成功不成功ハ未知數ノコトデ、ソノ成就不成功ハ未來ニカ、ツテ居ル已ニシテ國內産業ガ發達シテ來タノデ人口増加カラ來ル壓迫ハ漸クニ緩和セラル、コト、ナリ、千八百九十四五年頃カラ海外ヘノ移民ガ減ズルコト、ナツタ。同時ニ以前ト反對ニ外國勞働者ヲ呼ビ集メルヤウニナツテ、千九百八年ニハ八十萬人許リノ外國勞働者ガ獨逸國內ニ入込コト、ナツタ。コノ故ニ

獨逸ニ於テ人口ノ増加ガ産業ノ發達ヲ刺激シタ以上ニ、人口増加以外ノ諸原因ニヨツテ起ツタ産業ノ發達ニ依ツテカヘツテ人口増加カラノ壓迫ヲ除去シタモノノヤウニモ言ヒ得ル。

要スルニ獨逸ニ於ケル産業ノ發達ハ組織的ニ行ハレタモノデアル、已ニ組織的デアルガ大ナル訓練ヲ要スル、コノ訓練ノ效果ヲアゲルニ必要ナ國民ノ性質ハ服從的ニ勤勉デアルコトデアル。獨逸人ハコノ素質ヲ持ツテ居ツタ、而シテ彼等ハコノ素質ヲ統一アル組織的訓練ノ下ニ、産業的能力ニ造リ上ゲタ。獨逸ノ政治的組織トシテ、又傳説トシテ主權ハ人民ニアラズシテ全ク國家ニアル。コレガ産業社會ニモ至大ノ關係ガアル、即チ國家ハ自國民ヲ産業國民ニ造リ上ゲルタメニ組織的訓練ヲ與フルコトニ全力ヲ注イダ、教育ノ普及ハソノ結果デアツタ。然レドモ獨逸人ハコレガタメニ英米人ノヤウニ自主獨立ノ精神ヲ基礎トシテ個性的カラ社會的ニ働キカケルコトナシニ、服從的勤勉ノ習性ヲ更ニ、組織的訓練ノ下ニ練磨シテ個性ヲ國家ノ一屬性トシテ働クコト、ナツタ。從ツテ獨逸社會ニ於テ軍人階級ガ最上級ヲナシテ居ル如ク、國家ハアマリニ軍國主義ニ傾イテ居ル。而シテ個性ハコレガ犠牲タルナキカノ狀態ニアル、極言スレバ獨逸ガ産業ノ發達ニ力ヲ注グノモ結

局ハ軍國主義ヲ維持スル必要ガアルカラテ、從ツテ獨逸ノ施設シタ諸般ノ經濟政策ハ個性ノ上ニ根據ヲ置クヨリモ個性ヲ一ノ屬性トシテ居ルトコロノ而シテ個性ノ上ニ萬能力ヲ持ツテ居ルト信ズルトコロノ國家ノ上ニ立脚シテ居ル。モシコノ斷定又ハ推定ガ誤ラヌトスレバソレハ、英米兩國人ノ產業國民トシテ自主獨立ノ個性ノ上ニ立脚シテ居ルモノト、根本ニ於テ違ツテ居ルヨウデアル、要スルニ獨逸人ハ、英米兩國人ノ自主的產業國民タルニ對シテ、服從的產業國民ノヤウデアル。而シテ日本人ハ產業國民トシテ英米兩國人ニ似テ居ルヨリモ獨逸人ニ近イヤウデアル。コノ故ニ產業國民トシテ英米人ニ學ブヨリモ獨逸人ニ學ブ方ガ容易デアラウ、シカシナガラ我等ノ希望ハ日本人ノ服從的產業國民タラシヨリモ、自主的產業國民タルニアル、コレガ國民本位ノ產業國トナルコトデアアル。產業國民トシテ日本人ノ國民的習性ニツイテハ國民經濟雜誌第二十卷第二號及第三號所載ノ拙論文「產業ノ發達ト國民的習性」ヲ參照セラレタイ已ニ獨逸ハ服從的產業國民デアアル。從ツテ產業上優越ナル技能ヲ持ツテ居ルガ、ソレハ服從的道德ニヨツテ養ハレタモノデアアル、即チ獨逸ノ產業ハ國家ノ偉大ナル威嚴ノ下ニ發達シタモノデアアル。コノ故ニ我々日本人ガ獨逸カラ產業上何物カラ學ブトキニ常ニコノ事實ヲ忘

レテハナラヌ、而シテ我々日本人ハ總テヲ獨逸ニ學バネバナラヌデアラウカコレ
ガ甚ダ疑問デアル。(大正五年二月二十七日)